この腕時計は時間を合わせてくれない

ケセランパセラン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
この腕時計は時間を合わせてくれない

【Ｎコード】
Ｎ６４２１Ｗ

【作者名】
ケセランパセラン

【あらすじ】
主人公時島（ときしましょうご）正午はたまたま見つけた怪しい骨董品店で奇妙なデザインの腕時計を貰い受ける。しかしこの時彼はまだ知らなかった。これをきっかけに彼の平穏な生活がとんでもないことになっていくことを・・・

狂い始める時間（前書き）

はじめまして。小説初投稿になります。ケセランパセランと申します。ど素人なので文章力もなければきちんとした表現力もありません。本当にグダグダな作品ですがそれでもいいよと思いながら読んでいただけるとうれしいです。よろしくお願いします。

狂い始める時間

僕こと時島正午（ときしましょうご）は今日この日がくるのを楽しみに待っていた。なぜかって？なぜならば今日は、そう給料日！！一ヶ月に一度くる僕にとって一番楽しみな日だった。そして給料が振り込まれていることを確認した僕のテンションは今最高潮になっていた。

「さぁて、何買おうかなぁ♪」

とりあえず街に出てみたものの何も決めずに出てきてしまったのでとりあえずぶらぶらしている。しばらく歩いているととある店が目に付いた。

「こんなところにこんな店あったんだ」

少し古びた感じのこれは骨董品？の店だろうか。店先には見たこともない置物や明らかに異国のものであろう怪しい商品が並んでいた。

「なんだこれ、何に使うんだろう？」

それを見た僕は少し興味を引かれたので店の中に入ってみることにした。中に入るとますます怪しい雰囲気が濃くなっていった。何だか異世界にでも迷い込んだ気分だ。一通り店の中を見ていくとあるものが目に入った。それは、なんとも奇妙で独特なデザインが施された腕時計だった。ベルトの部分には見たこともない古代文字？のようなものが描かれており時刻を表す画面の部分は鈍い金色に光っていた。

「うわぁ・・すごいデザインだなこれ」

そう言いつつ手にとって見る。やっぱり何度見てもすごいデザインだった。そう思いつつしばらく眺めていると

「お気に召しましたかな？」

と突然後ろから声をかけられた。

「のわあああああああ！！」

突然後ろから声をかけられた僕はびっくりして飛び上がりそうになった。慌てて振り返るとそこには自分の背丈の半分ほどしか身長が

ないおばあちゃんが立っていた。
「おやおや、そんなに驚かんでもいいじゃろうが」
「あ、すいません」
あれ？何で俺謝ってるんだ？と思いつつも思わず謝ってしまった。
それにしてもこのおばあちゃんはいつからここにいたんだ？そんなことを考えていると
「その時計がおきに召しましたかな？」
とふいに僕が手に持っているものを指差しておばあちゃんが言った。
「ああ、いやすごいデザインだなぁと思いまして」
「そうじゃな、確かにすごい絵柄じゃな。じゃけどその時計は普通の時計とは少し違うものでな。それ故にそういった独特な絵柄になっとるんじゃよ」
「へぇーそうなんですか」
確かにデザインは普通じゃないけどそれ以外にどこが違うのだろう。
まじまじと見つめてみる。
その様子をみていたおばあちゃんがにっこり笑って僕にこう言ってきた。
「お前さんその時計気に入ったんならやろうか？」
「え！そんないいんですか？」
「あぁええよその代わり大事に使ってやっておくれ。少々わがままな子じゃがあんたなら大丈夫じゃろう」
は？何を言ってるんだこのおばちゃん。時計がわがままってどういうことだ？
意味不明な言葉を残しておばあちゃんは店の奥の方に消えていこうとしていた。最後にこちらの方に振り返って「それじゃ元気でな」と言われた。
思わぬ展開にポカーンとしてしまった。とりあえず店を出てからもう一度腕時計に目をやる。
「ま、まぁ貰えたんだしとりあえずよしとするか。」
無理やり自分を納得させて腕時計をポケットにしまい今日はもう家

に帰ることにした。
そして、僕はまだこの時知らなかった。これからまさかあんなこと
がおきるなんて・・・・

巻き戻される時間（前書き）

この辺から主人公の周りで異変がおき始めます。そして今回もグダグダです。すいません（泣）

巻き戻される時間

次の日、朝起きてからすぐに会社に行くための支度を始める。適当に朝食を作りそれをサッと食べ終えた後、着慣れたスーツに着替えて家を出ようとしたがそこであることに気ずいた。
「おっと腕時計するの忘れてた」
慌てて部屋に戻り腕時計を探す。しかし
「あれ、おかしいないつもここに置いてるはずなのに・・・」
部屋の中をいくら探しても時計が見当たらない。時間にさほど余裕があるわけでもないので慌てながらももう一度よく部屋の中を探す。その時あるものが目に入った。それは昨日あの店でもらった奇妙なデザインの腕時計だった。
「さすがにこれをしていくのはなぁ・・・」
どうしようかと悩んでいたが時計に表示されている時刻を見るともう家を出ないと会社に遅刻してしまう時間だった。
「うわ！！もうこんな時間！！しょうがない今日だけこの時計をしていくか」
腕時計をすばやく身につけて大急ぎで家をで出る。
「だぁぁぁぁぁ！！お願いだから電車に間に合いますように！」
いつもなら歩いて駅まで向かうはずなのだが今日は時間に余裕がないのでダッシュで駅を目指す。途中何度か信号につかまりそうになったが今日は運がいいのかスムーズに駅までたどり着くことができた。
「よし！！これなら間に合う」
そのまま改札をくぐろうとしたが
「ピンポーン。チャージ金額が足りません。」
という無機質な機械音とともに目の前をバリケードに塞がれてしまった。
「な！嘘だろ！」

もう一度やってみたがやはり結果は同じであった。仕方なく切符売り場に向かい慌ててカードに現金をチャージしようとしたその時
「〇〇線ドアがしまりまーす。ご注意ください」
というアナウンスがながれてきた。
「ぬぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!待って!!待って〜〜〜〜〜!!」
チャージが終わったカードを急いで引き抜き改札をくぐる。死に物狂いでホームを目指したが、時すでに遅し。目の前で扉が閉まる。そしてそのまま電車が発車した。
「う、嘘だろぉ〜・・・」
その場で大きくうなだれる。
「このままじゃ会社に遅刻しちゃうよ・・（泣）」
はぁ〜と大きくため息をつきどうしようかと考える。
「あ〜せめて後1分時間があれば間に合ったのに・・はぁ〜時間戻らないかなぁー」
そんなことを言いながら今日はじめて着けてきたあの奇妙な腕時計を見る。
あれ？そこで僕は気ずいた。時計の針が止まっている。もう一度よく見たがやはり針が動いていない。
「あらら、もう壊れたのかなぁー。はぁ〜」
思わずまたため息をつく。今日はついてないなぁーと思いつつトボトボとホームを歩いているとまたもや彼は違和感を感じた。静か過ぎる。そうあまりにも自分の周囲が静かだったのだ。人の話し声も車の走る音も誰かが歩いている時に聞こえる足音も何も聞こえない。
「？」
思わず周囲を見回す。そして彼は自分が見ている光景に思わず息をのんだ。
「なんだ・・・・これ・・」
みんな止まっている。まるで時間が止まったかのようにピタッと動きを止めているのだ。
「どうなってるんだ・・夢でも見ているのか」

自分の頬をつまんでみた。痛い、これは夢なんかじゃないということを認識する。そんなことをしていたとき突然グラッと目眩がした。おもわず壁に手をつく。
「うっ！！なんだ頭が痛い」
何が起こっているのか理解できないままひたすら痛みに耐える。しばらくするとだんだん痛みが引いてきた。落ち着いてきた頃に腕時計を見てみる。針は止まっているはずだったのだがよく見ると少しばかり時間が戻っていた。その時刻はちょうど電車がホームに来る少し前の時間だった。
「完璧に壊れてるなこりゃ」
そう思っていたとき
「うわ！？なんだこりゃ！！」
突然時計が光り始めたのである。その異様な光景に驚いているとさらにおかしなことが起きはじめた。周囲の光景がまるで逆再生でもしているかのように動き始めたのである。唖然としながらその光景を見ているとさっき行ってしまったはずの電車がホームに戻ってきた。そして電車の扉が開いたところで時計の光が消えた。消えたと同時に腕時計の針がまた一定のリズムを刻みながら進みはじめていた。
「〇〇線ドアがしまりまーす。ご注意ください」
ふいにそんなアナウンスがながれはじめた。ハッとなって急いで電車に乗る。ドアが閉まり電車が発車した。電車の中で僕は腕時計を見つめた。
「この時計一体どうなってるんだ？さっきのは一体？」
その日、僕の頭の中は一日中そのことでいっぱいになるのだった。

出会いの時間（前書き）

新キャラ登場！！幼女！幼女！幼（ｒｙ・・すいません調子に乗りました。そして相変わらずグダグダです（泣）

出会いの時間

「はぁ～・・・」
ため息をつきながら会社を出る。時刻は夜の９時をまわっていた。
今日自分の身に起きたことがいまだに信じられず一日中考えごとをしていたら見事に仕事が遅れ結果残業をするはめになってしまった。
にしてもだ、本当に今日のあれはいったい何だったんだ？自分の周りの時間が止まり挙句の果てには巻き戻るなんて普通じゃありえないことだ。しかし現にそれが目の前で起きた。その証拠に会社にも遅刻しなかった訳だし。
「はぁ～とにかく家に帰ろう。ゆっくり風呂に入って今日はさっさと寝よう」
そんな独り言を言いながら僕は家路についた。
駅からしばらく歩いていくと自分の家が見えてきた。やはり自分の家が一番ということなのだろうか急に気持ちがリラックスモードに切り替わった気がした。
「やっぱり家がいちば・・・ん？」
あれ？そこで僕は違和感を感じた。自分の部屋の電気がついているのだ。朝家を出た時にきちんと確認したはずなのに消し忘れていたのだろうか。不思議に思いながら玄関の前まできたときさらにおかしなことに気ずいた。部屋の中から音がする。何かを探しているようなガサゴソした感じの音が。
「おいおい、まさかこれって・・」
リラックスモードになっていた気持ちが一気に緊張する。
「もしかしてこれ空き巣ってやつか？」
どうしよう。警察に連絡するべきか。いや、でもあまり大事にしたくないしなぁ。うーん・・・とりあえず家に突入するべきかな？このままじゃ何されるか分からないし。
「よし！」

とりあえず一呼吸おいて気持ちを引き締める。そして神経をドアに集中させて僕は一気に扉をあけた。
「おい！！僕の部屋で何してるんだ！！」
少し怒鳴るような感じで中にいるであろう者に呼びかける。すると台所の方から物音がしていることに気ずいた。僕は息を呑みつつゆっくりと台所に向かう。
「誰かいるのか？」
そう呼びかけるが反応は無い。身構えつつゆっくりと台所に足を踏み入れた。するとなにやら小さな人影？のようなものが見えてきた。よく見ると僕が買いだめしておいたお菓子類をむしゃむしゃと食べているようだ。
「な、なんだ？あれ」
おそるおそる声をかけてみる。
「お、おいあんたそこで何してるんだ？」
すると、さきほどまでせわしなくお菓子に伸ばしていた手の動きを止めてそいつはゆっくりとこちらに振り返った。
「あ、主おかえりなさい」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・はい？」
えーと、うーんと待ってください。うん？主？つかこの女の子誰？え、また夢でも見てるの？馬鹿なの？死ぬの？待て待て待て待て、落ち着けまずは素数を数えるんだ。１、３、５（ｒｙチーーーン
「なぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」
な、なななな何この子？え？誰？どちら様？つか何で僕の家でお菓子食い漁ってるの！？
「き、君どうやって家の中に入ったの？つうか君誰？」
「私？私はあなたの腕時計だよ。正確には腕時計の化身かな？この間私をもらってくれたでしょう？で、新しい主が決まったからこうして外に出てこれたってわけ」
あ、あ、あ、頭痛てええええええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ。ま

ったく何を言っているのか分からない。腕時計？化身？意味がわからあああん。
「どうなってるのおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」
僕はどうしていいか分からずにひたすら叫びつづけた。そしてここから僕の平和な日常はとんでもないことになっていくのであった。

操られる時間（前書き）

時間を自由に操れるっていいですよね。うらやましぃー・・・

操られる時間

前回のあらすじ
家に帰ってきたら見知らぬ幼女がお菓子を食い漁ってました。めでたしめでたし。
「って全然めでたくねぇよ！！何一つ解決してないよ！ってかあらすじ短っ！！作者やる気出せよ！」
まったく一体何なんだ今日は。朝、変な体験をして一日中悩まされたかと思えば今度は家に謎の幼女だと！もう一度言おう幼女だと！
（大事なことなので2回言いました）あっなぜ2回言ったのかというと家にいたのが幼女だったということを強調するためであって決して僕はロリコンなどではない。うん、決して。とにかくだなぜ人の家に勝手にあがりこみお菓子をボリボリと食べてるんだこの女の子は。
「・・・・・・・・」
「ボリボリムシャムシャ」
はぁ～・・とりあえず落ち着こう。頭を冷やして冷静になるんだ僕。とりあえず現状把握だ。まずこの女の子は誰なのか。そしてどうやってこの部屋に入ったのか。そもそも部屋には鍵をかけていたはずなのだから入ることなんて不可能なはずなのに・・
「うーーーーーーーーん・・・・ん？」
頭の中で色々考えていたらふいに背中の方で違和感を感じた。振り返ってみるとそこには例の女の子がいた。お菓子で汚れた手で服をつかんでクイクイと引っ張っている。
「な、何？どうしたの？」
「あるじ、もっとお菓子食べたい」
「・・・・・・・・へ？」
よく見ると女の子は空になったお菓子の袋を持っていた。さらに後ろには空になったお菓子の袋が山になっていた。って全部食べたの

かよ！
「・・・・・・・・はぁ～」
まったく一体何者なんだよ本当に・・とりあえず
「あのさ、君どこから来たの？名前は？お母さんとお父さんは？」
これくらいは必要最低限質問しておくべきであろう。
「私の名前はクレム、さっき言ったと通りあるじがしているその腕時計の化身・・あるじが私をもらってくれたからこっちの世界にでてくることができた・・」
うん、なるほどさっぱり分からん！だから化身ってなんだ。今の質問で得られた情報この女の子がクレムって名前だってことだけじゃん。
「あ、あのさクレムちゃんだっけ？さっきから言ってるその化身ってのは・・」
「そのままの意味・・その腕時計に宿ってた・・」
宿ってた？これに？僕は左腕にしている時計に目をやった。奇妙なデザインで怪しげな骨董品屋でもらったこの時計から出てきたって？どこのファンタジーだよそれ。そんなこと思っているとまた服をクイクイと引っ張られた。
「ねぇあるじこのお菓子どこで売ってるの？」
「え？あ、あぁーこれは夏限定の商品だからもう売ってないよ」
もう１０月半ばの季節に夏限定はさすがに無いだろう。
「！？」
いやそんな世界が終わるみたいな顔しなくても。よほど気に入ったのだろうか。
「・・・・・それなら」
そう言ってなにやらブツブツと呪文のような言葉を唱え始めた。
「な、何やってんの？」
聞いてみたが反応は無い。どうやら集中しているようだ。仕方なくその様子を見ていると
「あれ？あ、痛っ！な、何だ！」

突然ひどい頭痛が襲ってきた。あれなんかデジャブ。こんなこと今朝もあったような・・僕の記憶が正しければこの後
「うわ！？」
予想通り腕時計が光った。これってまさか！？また同じことが起こるのか！そう思っていたが
「あれ？何か今朝より腕時計が光ってるんですけど！！」
あまりの眩しさに思わず目をつむる。頭痛もひどくなってきた。
「一体何なんだよ！！」
何がおきているのか訳が分からず僕はひたすら眩しさと頭の痛みに耐え続けた。しばらくするとだんだん光の強さが弱まってきた。頭痛も少しずつ治まってきた。
「はぁーはぁー・・一体何が」
「これで大丈夫なの」
ふいにブツブツ何か唱えていたクレムちゃんがそう言った。何が大丈夫なのかさっぱり分からなかったが。
「一体何したんだ？」
「これでまたあのお菓子が食べられるの」
はい？何言ってるんだ。
「だからねクレムちゃんあのお菓子は夏限定のやつでねもう売って・・」
ミーンミーンミーンミーン
へ？今変な音がしたような・・しかもなんか暑いし・・ま、まさかね・・
僕は恐る恐るカーテンを開けてみた。
「うわ！まぶしっ」
今の時間ではありえない光の眩しさが襲ってきた。そして外からはミーンミーンという音。空は雲ひとつ無い青空。こ、これって・・
僕は慌ててテレビをつける。ちょうど天気予報がやっていた。
「今日は夏らしい厳しい暑さとなりそうです。紫外線対策や熱中症対策を怠らないようにしましょう」

と美人なお天気キャスターが爽やかな笑顔で言っている。

紫外線？熱中症？今の季節には不釣合いな言葉に違和感ＭＡＸであった。

「も、もしかして・・・これクレムちゃんがやったの？」

「私以外に誰がいるのです。夏限定ならば時間を夏まで戻せばいいのです。まったく我ながらナイスアイディアなのです」

ちょっと待て。いま何ていった時間を夏まで戻す？

「戻せばってどういうこと？まさか今の季節って・・・」

「もちろん夏なのです」

あぁーなるほど夏限定のお菓子を買うために時間を夏まで戻したのか。あるあ・・ねぇーーよ！！！

「はぁぁぁぁぁぁぁあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！」

何か僕夏まで戻ってきたみたいです。

繰り返される時間（前書き）

僕は夏より冬派です。どうでもいいですねすいません。

繰り返される時間

「な、なんてこった・・」
本当に時間が戻ったのか。しかも夏まで。部屋を見渡してみるとカレンダーは7月になっていた。
「マ、マジかよ・・俺はもう一度夏をエンジョイしなければならないのか」
いや実際エンジョイなんかしてないけどね。むしろ仕事で暑い中歩き回ってたけどね。まぁそんなことは置いといてだ・・
「あるじ、早くお菓子を買ってくるの！」
「・・・・・・・・・・」
やっぱりこの子がやったのか。時間を戻したって言ってたし。でもどうやって？
「あ、あのさこれ君がやったんだよね。どうやったの？」
「んーと時間の構造を元から捻じ曲げてそれから・・・」
うん、ぜんぜんわからん！わかってたけど無茶苦茶すぎるわ！ドラえ○んか！
「と、とにかく早く時間を戻してよ。もういちど夏を過ごすなんてごめんだからな」
「お菓子買ってきてくれたら元に戻してあげるの」
ぐぅ・・し、仕方ないお菓子買ってきたら時間を戻してくれるといってるしさっさと買ってくるしかないか。
「わかった今から買ってくるから少し待ってな。けれど買ってきたら時間戻してよ」
「わかったから早くいってくるの」
くぅうううううう～なぜだ、なぜ俺が買いっ走りに行かなければならないんだ。人の家に勝手に上がりこんでお菓子食ってるやつのために。
「はぁ～・・じゃあいってきます」

「あ、あるじ」
「？何」
「言い忘れてたけど一個じゃなくて十個買ってきてほしいの」
「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
この野郎どこまで図々しいんだ！。ってかどんだけ食うんだよ！
「一個じゃだめなの？」
「だめなの」
ちくしょおおおおおおおおおおおお！！こんな理不尽が許されるのか。
「わ、わかったよ・・・行ってきます」
「行ってこーいなの」
・・・・・はぁ～～～～～～。思いっきりため息を吐きながら外に出る。
「あぁー・・暑い・・・」
部屋にあった夏服に適当に着替えてから出てきたがやはり暑い。日差しが痛い。紫外線が、紫外線がああああああ。しばらく歩いていくとスーパーが見えてきた。中に入ると
「ああ～～生き返る～～」
クーラー涼しい～。つい三ヶ月くらい前にも同じ経験をしているのだけれどやはりこの瞬間は同じこと考えるんだな。そんなことよりさっさとお菓子を買って帰るぞ。
「え～と・・・あ、あった！」
夏限定と大きな文字で書かれたお菓子のコーナーを発見。
「えっと十個だよな。まったく本当にどんだけ食うんだよ」
とりあえずかごにぶち込んでさっさと会計をすませる。さっさと家に帰ろう。そんでもってさっさと時間を戻してもらわねば。スーパーから出て自宅に向かう。その途中で薄着のナイスバディな外人さんとすれ違った。まさにボン、キュッ、ボンな感じの。まぁ夏も悪いことばかりじゃないよね、うん。
「ただいまぁ～あちぃ～」

しばらくして自宅に帰ってきた。
「あ、あるじお帰り」
「ほら買ってきたぞ」
お菓子の詰め込まれた袋を渡す。するとクレムちゃんの表情が一気に明るくなった。
「ありがとうなの。ボリボリムシャムシャ」
食うのはやっ！ったく・・・・しょうがない子だよホント。そんなこと思いながら僕は少しの間彼女を眺めてみた。色々あって気ずかなかったけどよくみるとこの子綺麗な顔立ちしてるよなぁ。髪もきれいな金色に輝いてるし、瞳も透き通った綺麗な海を彷彿とさせる青色をしていた。彼女の服のいたるところには時計の針をモチーフにしたようなアクセサリーがついている。少なくとも日本人に見えるようなカッコウではなかった。やっぱりこの時計の化身ということなのだろうか。
「じーーーーーーーーーーー」
「ん？」
何か知らないうちにじーっと見つめられていた。
「あるじもお菓子食べたいの？」
「へ？」
「少しなら分けてあげるの・・はい」
ずいっとお菓子の袋を突き出してきた。
「あ、ありがとう」
じゃあすこしだけ、ボリボリ。最近お菓子を食べてなかったがやっぱり美味いもんだな。
「あ、ところでさ時間早く戻してよ。約束したでしょ」
「そんなに元に戻してほしいの？」
当たり前だこんな急に時間を戻されても困る。仕事もあるし。
「わかったの。しょうがないから戻してあげるの」
しょうがないからってところが引っかかるがまぁいいだろう。とにかくこれでもとの生活に戻れるわけだ。

「・・・・・・・・・・・・・・」
「あれ？どうしたの？早く戻してよ」
「お願いしますは？」
「・・・・・・・はい？」
「お願いしますクレム様時間を戻してくださいって言ったら戻してあげるの」
・・・・・・ん？空耳かな？今この子なんて言った？クレム様？お願いします？
「え、ごめんよく聞こえなかったんだけどなんて？」
「だから、お願いしますクレム様時間を戻してくださいって言ったら時間を戻してあげるの」
な、なななななななななななななななななな
「なんでじゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁああああああああ！！！」
意味がわからん！！何でそんなこと言わなければならんのだああああああ！！
「ちょっと待ってよ！何それ！何でそんなこと言わなきゃいけないんだよ！」
「嫌なら別にいいの。そのかわり時間は元に戻さないけどそれでもいいのなの？」
こ、こんの野郎なぐりてぇぇぇぇぇぇぇぇ。そんな時俺の記憶である言葉が思い出された。
「少々わがままな子じゃがあんたなら大丈夫じゃろう」
はっ！まさかあの時あのおばあちゃんが言ってたわがままな子ってこういうことだったのか。
「さぁどうするの？」
くっ・・・・・この際時間が戻るならこれくらい我慢するべきなのだろうか。だけどこれを言ったら僕のなかで何かが崩れそうな気がする。
「ぐぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ」
しかしこのまま悩んでたって何も始まらない。ここは僕が折れるし

かないか・・・。
「・・・お願いしますクレム様時間を戻してください」
「ん～よく聞こえないの。もっと大きな声で言うのなの」
「くっ・・・お、お願いしますクレム様時間を戻してください！！」
「うむ、よく言えましたなの」
その瞬間クレムちゃんが何かを唱え始めた。そしてあの時のように腕時計が光始める
「あ痛っ！」
そんでもってまた頭痛が襲ってきた。しばらくすると時計の光と頭痛が治まって意識がはっきりしてきた。
「うぅ～・・・も、戻ったのか？」
部屋を見渡しカレンダーを見てみる。ページは十月になっていた。外の様子も蝉も鳴いてないしまぶしすぎる日差しもなくなっていた。
「戻ってこれたんだ・・」
「これで満足なの？」
ふいにクレムちゃんに話しかけられた。
「あ、あぁ満足だよ」
「そうなの。まぁあるじが私にお願いしますクレム様なんて言ってまで戻りたかったじかんだものね～」
！？そうでした僕はそんなこと言ったんでした・・
「はぁ～・・・・」
「まぁまぁ元気出してなの。このことは誰のも言わないようにするから安心するの」
ニヤニヤしながらいうんじゃないよ！
「とにかくこれからもよろしくなのあるじ」
「これからもって・・・はぁ～～～～」
僕この先どうなるんだろうか。そんな不安を抱きつつ僕は思い切りため息を吐いた。

遡る時間　前編（前書き）

・・・・・はっ！

クレム「あっ、作者が生き返ったなの」

時島「え！？作者死んでたの！」

というわけでひさしぶりに更新でございます。そしていつも以上にグダってます。申し訳ございませ・・・ぐはっ！！（書ききる気力が無くて前編、後編に分けましたｏｒｚ）

遡る時間　前編

次の日。朝少し遅めに目が覚めた。今日は仕事が休みだ。今日は一日のんびりすごそう。
「ふあぁ～～～・・・んーー・・ん？」
あれ？なんだろうものすごい腕に違和感があるんだが。ゆっくり腕のほうに視線を向ける。
「くぅ～ふぅ～・・んにゅ～・・むにゅむにゅ・・」
・・・なぜだ、なぜ俺の隣で寝てるんだ。一人暮らしをしているはずの俺の隣になぜ女の子が寝ているんだ。っていうか俺別の部屋に寝かせたよな。何でここに移動してるんだよ。
「はぁ～・・どうしよう動けない」
とりあえず起こすか。
「おーいクレムちゃん朝だぞ、起きろー」
軽く体を揺さぶりながら声をかけてみる。しかし
「ふにゅ～・・すぴー・・」
起きる気配まったくなし！うーんまいったなこりゃ。
「クレムちゃん朝だよ起きて。っていうか腕から離れて」
今度は少し強めに体を揺さぶる。すると
「う～ん・・んにゅ～・・ふぁ～・・あ、あるじおはよう」
「ふぅーやっと起きたか。おはよう」
「うん。じゃあおやすみ・・」
ってうおーーーい！！
「ちょっ！！起きてクレムちゃん。起きろーーーーーー！！！」
「うーーんまだ眠いの」
そういってクレムちゃんがなにやら唱え始めた。あれ、この展開なんだか見覚えがあるぞ。次の瞬間、頭痛が襲ってきたかと思うと近くに置いておいた腕時計が光り始めた。
「ちょっ！！またかーーーーー！」

しばらくして頭痛が治まり時計の光がおさまった。俺は恐る恐る目を開けて周りを確認してみた。壁にかけてあるデジタル時計が示す時刻は・・

「よ、夜の１０時・・・」

「ぐぅーー・・すぴー・・」

・・・おいおいそんなのありか。眠いから時間を夜にするとか本当になんでもありなのかこの子は。確かに眠いときにはまだ朝が来なければいいのにと思うことはあるけれども。無茶苦茶にも程があるぞ。

「はぁーこうなったら仕方ないか」

まぁとりあえず俺が今すべきことは一つ

「ふうぅーーーー・・」

俺はゆっくりと息を吐いてクレムちゃんの頭に狙いを定めた。そして腕にある程度の力をこめて

「起きんかくらぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

懇親のチョップを振り下ろした。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・

「まったく、あそこまですることないじゃないなの」

軽く腫れた頭をさすりながらクレムちゃんが少し不機嫌そうな顔で言ってくる。

あの後クレムちゃんはようやく完全に目を覚まし時間もすぐに元に戻させた。けれどもよほど痛かったのかずっと機嫌が悪い。

「悪かったって。こんどおいしいお菓子買ってきてあげるから、な？」

「一個じゃすまないの。たくさんお菓子を買ってきてくれるなら許すなの」

「わ、わかった。たくさん買ってやるから」

「じゃあ許してあげるの。けど絶対に忘れちゃだめなのよ。忘れたら時間を原始時代まで戻してやるの」

「はい絶対に忘れません！」
原始時代とか恐ろしいわ！それだけは絶対に回避しなければ。
まぁそんなこんなでとりあえずクレムちゃんの機嫌は直ったようだった。はぁ～朝からなんか疲れた。
せっかくの休日なのになんでこんなに疲れなくちゃならんのだ。そんなこと思っていたときだった
ピンポーン
「ん？誰だ？」
誰か来たようである。軽く身なりを整えてから玄関を開けると
「おはようございます。時島さん」
そこにいたのはとてつもなく綺麗なおねえさんだった。整った顔立ち、すらっと伸びた背、そして見事なプロポーション。まるでモデル雑誌に載っているモデルさんのようなおしゃれな服を着て俺にまぶしいほどの笑顔を向けているこの人はお隣に住む，深夜　恵，（ふかや　めぐみ）さん。
俺の憧れの女性であった。
「お、おおおおおおおおおはようございます！！」
突然の出来事に動揺しまくる。まさか彼女のほうから家に訪ねてくるなんて思ってもみなかった。
「すいません。こんな朝からお尋ねしてしまって」
「い、いいいいいいいいいえ！！全然問題ないです！はい！」
おいおい何だこのテンションのあがりようは！俺の頭の中では軽い祭りがおきてるぞ。
「そ、そそそそそそそれでどうなされましたか？」
「あ、いえ実は昨日の夜時島さんこの辺で変な人見かけませんでしたか？」
「へ、変な人というのは？」
「それが・・あまりこういうことは言いたくないのですけれども最近誰かが私のことをつけてくるというか何だかずっと見られているような気がして」

「え、それってもしかしてストーカーみたいなことですか？」
確かにこんな美人な女の人ならストーカーの一人や二人いるかもしれないなぁ。
「えぇ・・それに昨日郵便受けにこんな手紙まで入っていて・・」
そういって差し出された手紙を読んでみる。
「なんだこりゃ」
その手紙には一言こう書かれていた
‘君は僕だけのものだ’
「私怖くて。だから時島さんお隣ですし誰か変な人見かけてないかと思いまして。」
「いやぁー。昨日はちょっと疲れちゃっててすぐに寝ちゃったんでわからないですねぇー」
「そうですか・・・」
「警察とかには連絡したんですか？」
「ええ、一応。そしたら近辺のパトロールを強化してくれると仰ってましたけど」
ふぅぅむ・・これは心配だなぁ。もし深夜さんの身に何かあったら大変だし。
「とりあえず、俺も周りに気をつけてみます。あと何か困ったことがあったら遠慮なく言ってください」
「ええ、ありがとうございます」
そう言って彼女が微笑む。うおっ！まぶしい！まぶしいぜ！！
「それじゃあすいませんがよろしくお願いしますね」
そう言って彼女は自分の部屋に戻っていった。
「うーん、ストーカーかぁ・・」
やっぱりいるんだなぁ。いつの時代にも。
「にしても昨日の夜かぁー・・・あ！！」
そうだこんな時にこそあの子の出番じゃないか。
「クレムちゃん！！」
「ど、どうしたの？何テンションあがってるの」

「時間を昨日の夜まで戻してくれ」
「へ？」
クレムちゃんはポカーンとしている。いつもは時間を戻せとうるさい俺からそんな言葉がでるとは思はなかったのだろう。
「でもさっきは夜に時間戻したらしたら怒ってたじゃないの」
「事情が変わったんだ。とりあえず夜まで時間を戻してくれ。早急にそして的確に」
「だが断る」
「なんで！？」
「なんだかこき使われてるみたいで嫌なの。それに人にお願い事するときはそれなりの態度ってもんがあるのなの」
「お願いしますクレム様。どうか時間を夜まで戻してくださいませ」
「あるじ、本当にどうしたの？」
ふっ・・この際プライドなんて捨ててやる。もしこれで彼女を狙うストーカーを捕まえられたら高感度アップ間違いなし！下手すりゃお礼にあんなことやこんなこともできるかもしれないし・・・
「なんか、あるじ気持ち悪いの」
「気持ち悪いとはなにかぁーー！」
とにかく・・・
「お菓子でも何でも好きなもの買ってきてやるからお願い！！」
「うーん・・そこまでいうならわかったなの」
っしゃあああ！！
「それじゃあさっそくいくの」
そしてクレムちゃんが呪文のようなものを唱え始めた。しばらくして
「イタッ！」
頭痛が走り、時計が光る。なんだかすっかり慣れてきた一連の流れを終えてから時間を確認する。時刻は夜の１９時。
「よーし、それじゃあいっちょやりますかぁーー！！」
「何をなの？」
こうして俺とクレムちゃんのストーカー退治が幕をあけた。

遡る時間　後編（前書き）

グダグダ更新再開です。よろしくお願いします。

遡る時間　後編

「クレムちゃんとりあえず作戦会議だ！！」
「だから一体何をするきなの？」
「ストーカーを捕まえるんだよ」
「ストーカー？」
クレムちゃんの頭からクエスチョンマークがでていた。クレムちゃんはストーカーという存在を知らないようだった。うーんいちいち説明するのもめんどくさいしどう説明するかな。
「うーんと、とにかく悪党退治をするってことだよ。そのストーカーのせいで家のお隣さんが困っているから助けてあげるんだ」
とりあえず適当に説明してみた。するとクレムちゃんはなぜだか目をキラキラさせていた。
「悪党退治！なんかかっこいいの！」
どうやらうまくやりこめたようだ。なんだかんだいってこいつもまだまだ子供ってことか。
「だろ？だからこれからそのための作戦会議をするのさ」
「わかったなの！」
クレムちゃんもやる気が出てきたところで本格的に作戦会議を始めることにした。
「よーし、ではまずこれから起こることを説明しよう。今からお隣さんの家にストーカーがやってくる。そしてそいつは手紙を残してどっかに行っちまう。だからそいつがどっかに行っちまう前にそいつをとっ捕まえて俺の好感度をＵＰさせ・・・」
「ん？好感度？」
「ゲフンゲフン！じゃなくてお隣さんを助けてあげようということなのですよ」
「なるほど、とにかくそいつを捕まえればいいということなのね」
「そういうこと」

まぁ、そういうことなのだけれどストーカーなんてそう簡単には捕まえられないだろう。もし危ないやつならこちらにも何か危害が及ぶかもしれないわけだし。どうしたもんかねぇ。
「で、作戦って具体的にどうするきなの？」
「それを決めるための会議さ。つってもノープランだけど」
うーんとうなりとりあえず何かいい案は無いものかと考える。クレムちゃんもなにか考えているようだった。
その時だった。
「・・・・ん？あれ？」
家の前の廊下からなにやら足音が聞こえてきた。深夜さんかと思ったがその足音は女の人のものとは思えないくらい大きな音だった。その足音はこっちに向かって歩いてきている。しばらくしてその足音が止まった。しかもちょうどお隣の深夜さんの家の前で。
「え！嘘もう来たの！？」
俺は慌てて玄関を開けた。廊下に出て深夜さんの家のほうを見た俺は思わず叫び声をあげた。
そこにいたのは身長は2メートルを超えているであろう大きな男がいた。体つきもかなりよく筋肉がはちきれんばかりに露出していた。一瞬化け物でも見ているのかと錯覚するほどだった。
「主どうしたの！！」
クレムちゃんも廊下に出てきた。そこで男は慌てて逃げ出そうとしていた。
「あ、こら待て！！」
もうこうなったら！！
「作戦実行だーー！！」
「え？作戦って？」
「正面突破ーーーーー！！」
「バカなの！？ここにバカがいたなの！？」
逃げる男に向かって全力でダッシュしながら俺はタックルをかました。しかし俺みたいな平凡な体つきの男のタックルなんて効くわけ

もなく見事に跳ね返されてしまった。
「あふん・・・」
「ちょっ主！！」
だめだ。結局なにもできないままあの男を逃がしてしまうのか。そう思ってあきらめようとしたときクレムちゃんが何か唱え始めた。
「え？イタッ！！」
そのときまた頭痛が起きて時計が光った。そして頭痛や光がおさまった時俺は周りの異変に気がついた。
「う・・あれ？」
「主！！大丈夫なの？」
「あ、ああ何とか大丈夫。それより何やったの？」
するとクレムちゃんは得意げな顔で
「簡単なの。時間を止めてやったの」
・・・・・・・・・・・・・・ああああああああああああああああああああああああああああ！！！その手があった！！てかなぜ早く気がつかなかった俺ーーーーーーーー！！
「お、俺バカだった・・」
「知ってるの（笑）」
ぐさっ・・という音がどこかから聞こえてきた気がした。
「ううう・・・はっそれよりあの男を捕まえなきゃ！！」

とりあえず家にあった荷縄とかガムテープやらで男の両腕と両足を縛っておいた。
「・・・・こんなんで大丈夫なの？」
「大丈夫・・だと・・思う・・よ」
本当はかなり不安だったがこれ以上どうしようもないのでとりあえずこれでよしとした。
「じゃあ、時間を動かすなの」
「お、おう」
クレムちゃんが何か唱え始めて一連の流れが終わりまた時が動き始

めた。
「・・・ん？あれ・・」
男が気ずいたようだ。自分に何が起こったのか分からないようで混乱した表情をしていた。
「な、なんだこれ・・どうなってるんだ！！」
男が急にもがき始めた。その光景はまさに捕らえられた猛獣が暴れているような感じだった。
「主、何だか怖いの」
クレムちゃんが俺の後ろで震えていた。
「だ、大丈夫だから・・・とりあえず、おい！あんた！！」
男に呼びかけると向こうはこちらに気ずいたようだ。
「な、なんだあんた・・これほどいてくれ！！」
「誰がほどくか！このストーカー野朗！！お前のせいで深夜さんが困ってるんだよ！！」
「ば、誰がストーカー野朗だ！！俺は純粋に俺の気持ちを伝えようと・・」
「じゃあ、これはなんだよ」
俺は郵便受けに入っていた手紙を見せた。
「こ、これは・・俺からのら、ラブレターだ！！」
「どこがだよ！！これのどこにラブレター成分があるんだよ！！」
‘君は僕だけのものだ’なんてどういう感性してるんだよ！！この男は！
「う、うるせーー！だいいちお前は何なんだ。彼女の知り合いなのか？」
「俺は深夜さんの隣に住んでるものだ。彼女に最近誰かにつけられてるような気がするって相談されてたんだ」
俺が説明すると男は急にシュンとなった。うわ、強面の男がシュンとするのって何かキモイな。
「俺はただ彼女に声をかける勇気が無くて・・それでいつかは声をかけてみようと思って後をつけたりしていたんだが・・そうだよな

こんな男がついてきたらそう思うよな」
「わかってるならやめろよな」
「でもこのままだと絶対に後悔しそうな気がするんだ」
「・・・・・」
うーん・・なんとなくだがこの男が少し可愛そうに思えてきた。別に悪意があるわけではないみたいだし。
そう考えていたときクレムちゃんが俺の背中から少しだけ顔をだして男に向かってこう言った。
「男ならもっと堂々ととするなの。ウジウジしてる男は嫌われる・・なの」
そういわれた男はまたさらにシュンとなってしまった。
「そう言われても・・俺は臆病者だからな」
何だろうこの時俺は少しこの男を応援したい気持ちになった。たしかにこいつがやったことは許せることではないが。
そう考えているとき廊下の向こう側から足音が聞こえてきた。そして見えてきたその人影は今まさに話題になっているその人だった。
「あら、時島さん。どうされたんですか？」
「ふ、深夜さん！！」
「！！！！！！」
「すごい綺麗な女のひとなの」
すごい状況になってしまった。ど、どうしよう。
「えーと、この状況はいったいどういう・・」
「あ、いや深夜さんこの間誰かにつけられてる気がするって言ってたじゃないですか。その犯人がこいつなんです」
「え？私そんな相談しましたっけ？」
あ、しまった。時間を戻してるからまだ俺は深夜さんに相談されてないんだった。
「と、とにかくこの男があなたのことをずっとつけてたみたいなんです」
「そうだったんですか・・」

深夜さんに見られて男は顔を伏せてしまった。顔はパッと見ただけでも分かるくらい真っ赤になっている。さすがに可哀想かもなぁ。そう思っていたら
「あのね、お姉さんこの男の人が言いたいことがあるんだって」
クレムちゃんが深夜さんに向かってふいに言った。
「え？言いたいこと？」
クレムちゃんが男に近ずいて縛っていた荷縄やガムテープをはずし始めた。
「男ならウジウジしないで言いたいことというの」
そう言われた男はしばらくクレムちゃんを見つめた後何かを決心したように頷くと立ち上がって深夜さんと正面から向かい合った。
俺はその光景を固唾を飲んで見守っていた。
「あ、あの！！」
「は、はい」
さすがにこんなにでかい男と真正面から向かい合ったら怖いのだろう。少し彼女の体は震えていた。
「こんなことして嫌な思いさせたことまず謝ります。すいませんでした。じ、実は俺あなたのこと一目見たときから気になっていてそれで・・あの・・」
男は大きく息を吸い込みそして
「よ、よろしければ俺とお付き合いしていただけないでしょうか！！」
言ったーーーーーーー！！ついに言いやがった！さぁどうなる。どうなるんだ。俺的にはもちろんフラれてほしいのだが。っていうか今さら思いついたけどこれで成功したらどうしよう！！
「え、えーーと・・・その私」
おい、まさか！やめてくれーーーーーー！！
「ごめんなさい！！！」
「え・・・・」
一瞬周りが静寂に包まれた。そして男はそれを聞いて何か吹っ切れ

たような表情をしていた。
「そう・・・ですか・・」
「本当にごめんなさい」
「いえ・・きちんと返事聞けただけで俺は満足です」
男はクレムちゃんに向かって
「ありがとなお譲ちゃん。おかげでなんかスッキリしたよ」
そういわれたクレムちゃんは少し頬を赤らめて照れたようにしていた。
「それじゃあ、俺行きます。今まで迷惑かけて本当にすいませんでした。」
深々と頭を下げて男は行ってしまった。
それを見送りながら俺のココロの中では
セーーーーーーーーーーーーフ！！！危ねぇ！！とにかくよかった！
なんてこと思っていた。
「主、なんだか嬉しそうなの・・」
「うえ！？そんなことないよ。ははははは」
とりあえず何とか解決かな。
「時島さん」
「は、はい！！」
「その、なんだかよく分からないですけど色々してくれてたみたいでありがとうございます」
「い、いえこんなことくらい朝飯前ですよ。だははははははは」
「それで時島さん・・・あの・・」
「は、はいなんでしょうか！！」
きたーーーーーー！！何だ！何が起きる！！あんなことか？こんなことか？もしかしたらさらにすごいことができたりしちゃうかも！！ふぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！
「その・・ですね・・」
ドクンドクンドクンドクンドクンドクン！！！

「・・・・・・この可愛い子なんですかぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーー！！」

「・・・・へ？」

「時島さんのお子さんですか？もうすっごい可愛いわーーーーーーー！！」

「うにゅ！く、苦しいの・・・」

深夜さんがものすごい勢いでクレムちゃんをモフモフムギュムギュしている。

「あ、あの・・・深夜さん？」

「はっ！ごめんなさい。私・・じ、実は小さい女の子が大好きなんですーーーー！！」

・・・・はい？な、何だこの展開は・・・俺の予想から大きくずれたぞ。

「あなた、名前はなんていうの？」

「私の名前はクレムなの・・・むぎゅ！！」

「クレムちゃんって言うのね！！可愛いわーーーーーーー！！きゃーーーーー！！！」

ムギュムギュモフモフ。

・・・・なぜだ。俺の予定ならばムギュムギュモフモフしてもらうのは俺のはずだったのに。

「あ・・・あ・・・・」

ち、ちくしょおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！

俺はクレムちゃんが深夜さんに可愛がられている光景を羨ましそうに見ていることしかできなかった。

ガクッ・・・・・

置いてけぼりの時間（前書き）

なんとか８話目です。よろしくお願いします。

置いてけぼりの時間

次の日。この日は仕事が休みなので家でまったり過ごしていた。
「ねぇ、主」
「ん～何？」
「今日はずっと家にいるの？」
片手に俺が買ってきたお菓子を抱えながらクレムちゃんが聞いてきた。
「そうだねー。特に行きたいところもないし家でまったりしてようかなと思ってるけど」
「そうなの」
「けど何で？」
「べ、別に聞いてみただけなの」
そう言ったクレムちゃんの顔は気のせいかどこか嬉しそうだった。
なんだろう？何かいいことでもあったのかな？
「まぁ、でも明日からは仕事だからクレムちゃんにはお留守番して・・・・・・」
そこまで言って俺はハッとなった。そうだよ明日からはこの家にクレムちゃんを一人で留守番させなきゃいけないんだ。
「・・・・・・」
「ん？どうしたの主？ボリボリムシャムシャ・・」
・・・・・不安しかねぇえええええええ！！
「あ、あのさクレムちゃん明日からなんだけどさ俺仕事があるから帰ってくるまでお留守番しててほしいんだけど・・・だ、大丈夫だよね？できるよねお留守番？」
「え・・・・」
あ、あれ？なんかクレムちゃんが固まっちゃった。さっきまで美味しそうに食べていたお菓子も食べるのやめちゃったし。
「クレムちゃん？」

「お留守番ってことは一人で家に居なきゃいけないってことだよね？」
「まぁそうだよね」
「・・・・やなの」
「はい？」
「一人ぼっちは嫌なの！！」
「うお！！」
「やだよ・・・一人になるのはもう嫌なの・・・」
クレムちゃんが泣きそうになりながら俺にしがみついてきた。
「え？えええええ・・・」
予想外の反応にどうしていいか分からなくなる。
「く、クレムちゃんとにかく落ち着いて」
とりあえず、なだめることにした。
しばらくして・・・
「大丈夫？」
「ぐすっ・・・うん・・」
なんとか落ち着いたようだ。
にしても、まさかこんなことになるなんてな。正直かなりあせった。
だってクレムちゃんがお菓子にまったく反応しないのでどうすればいいのかわからなかったんだもん。
「ねぇ、クレムちゃん」
「スン・・・なに？」
「さっき言ってた‘一人になるのはもう嫌’っていうのは？」
「！？そ、それは・・・」
顔を真っ赤にしてクレムちゃんがあたふたしている。あれ？なんかちょっと可愛いかも・・・
はっ！！！ちがうちがうちがう！！そうじゃない！俺は決してロリコンではないぞ、うん！
「それは？」
「・・・主には言いたくないの」

「はぁ？なんだそれ」
「と、とにかくなんでもないの！！」
うーん。この反応を見る限りだと過去に何かあったってことだろうか。まぁ、けれども言いたくないって本人が言ってるんだしあまり詮索するのも可哀想かもな。
「わかった、とりあえずそのことは置いておくことにしよう。それよりも明日のことだよ。一緒に仕事場に連れて行くわけにもいかないし・・」
「・・・・・・」
どうしたもんかな。
「やっぱりお留守番ってことになっちゃうのかなぁ」
「うぅ～・・ぐしゅ・・」
また、クレムちゃんが泣きそうになっている。マジでどうしようか。
そう考えているときだった
‘ピンポーン’
「ん？誰だ？」
誰か来たようだ。軽く身なりを整えてから少しだけ玄関を開ける。
「はーい、どちら様・・・・」
「正午ーーーーー！！」
勢いよくドアの横側から誰かが飛び出してきた。そしてそのときになぜか俺の名前を叫んでいた。
「・・・・・・え？」
「え？じゃないわよ。反応薄いわねぇ」
俺はその声になぜか聞き覚えがあった。それにこのやたらテンションの高そうな感じもなんとなく俺の知っている人に似ているような気がする。そして俺の予感は見事に的中した。そう、そこにいたのは
「ね、姉ちゃん！？」
「やっほー！久しぶり」
俺の姉こと「時島　朝日」（ときしま　あさひ）だった。
「元気にしてたー？久しぶりにあんたの顔が見たくなってさー。来

ちゃった」
「来ちゃったって、いくらなんでも急すぎるだろ・・連絡くらいしてくれればいいのに」
「いやー、驚かせようかと思ってねー」
まったく、自由すぎるだろ。こっちは今、大変なめにあってるってのに。
「とりあえず、おじゃましまーーーーす！！！！」
「あ、ちょっと！！」
勝手にズカズカと姉ちゃんが部屋に入っていく。
家の中に入るなりいきなりはしゃぎだす姉。ってか何で俺の家ではしゃいでるんだこいつは。
「うわー正午の家久しぶりに来たーーー！！」
姉ちゃんが何かに気ずいたようだ。なんだ？姉ちゃんの視線をたどるとその先にはクレムちゃんがいた。
「あははははー・・ってあれ？」
そっか姉ちゃんはまだ子のこのこと知らないんだもんね。
・・・・・・・・あれ？それってやばくね？
ってああ！！
やべぇ！そうじゃん。姉ちゃんクレムちゃんのこと知らないじゃん。ど、どうしよう・・・
「正午」
「な、なんだよ」
姉ちゃんがクレムちゃんににじり寄りながらなにやらジロジロ見ている。
「な、なんなの？あなた誰なの？」
「姉ちゃん、これはその・・」
そう言いかけたとき
「可愛いいいいいいいいーーーーーーー！！」
むぎゅーーーーーー！！！

「ぶにゃ！！！」
姉ちゃんがクレムちゃんを抱きしめた。
「ちょっと正午！！なんなのこの子！あんたいつの間に子供作ってたの？」
「・・・えーと」
「まぁ、いいかそんなこと。にしても可愛いわーー！！お人形さんみたい！！」
姉ちゃんに抱きつかれてクレムちゃんが苦しそうにバタバタしていた。
なんかこんな光景、昨日も見たような。
「あ、あはははは・・・はぁ～」
こうして俺の家に突如現れた俺の姉ちゃんまで加わり平和だった俺の生活はまたしても変な方向に向かうのであった。
「なんとかなる・・・かなぁー？」

にぎやかな時間（前書き）

一人暮らしに憧れる。今日この頃・・・・

にぎやかな時間

「ねぇねぇあなた名前はなんていうの？」
「わ、私の名前はクレムっていうの」
「クレムちゃんっていうのね。私の名前は時島朝日っていうの。よろしくね」
むぎゅーーーーーー
「よ、よろしくなの・・ところで朝日」
「んーーーー？」
「何で私のことさっきから抱きしめてるの？ふにゅ！？」
「何でって決まってるでしょ？可愛いものは抱きしめる！！これ常識！！」
「あの～・・・」
「うん」
「そうよ、教えてもらわなかった？」
「そうなの？常識なの？」
「じゃあ私がこれから色々教えてあげるわね。すりすり・・・」
「お～い、ちょっとー・・」
「ねぇ朝日、やっぱりちょっと苦しいの」
「あらそう？じゃあギューはやめてすりすりにするわね」
すりすりすりすり・・・
「な、何かくすぐったいの」
「すぐ慣れるわよ・・すりすりすりすり・・」
すりす・・・
「ええ加減にせええええええええええええええええ！！」
いつまですりすりしてんだよ！！俺がつっこまなかったらすりすりで終わってたんじゃないかマジで！！
「なによ、正午ー。せっかく人がお楽しみ中だったたっていうのに」

「楽しむな！！ってか何ナチュラルに馴染んでるんだよ！！何しに来たんだよ姉ちゃん！」
「だから、さっきも言ったでしょ？久しぶりにあんたの顔が見たくなって来ちゃったのよ」
・・・絶対嘘だ。俺の姉は弟の顔が見たくなってわざわざ会いに来るような人間ではない。
「あ、そうだ旦那さんはどうしたんだよ？」
「それは・・・・」
そう、うちの姉は最近結婚したばかりで新婚ホヤホヤ生活をしていたはずなのだ。
「それは？なんだよ」
「・・・・・・・」
「なぁってば」
「知らないわよ、あんなやつ」
「はい？」
「と、とにかく私しばらくはここに泊まるから」
「はあああああああああああああああ！！」
何を言っとるんだこの人は！？
「いやいやいや！！そんな急に泊まるっていわれても」
「大丈夫よ。一応泊まる用意はしてきてるし、それにただで泊まるつもりじゃないわよ」
「は？どういうこと？」
「私があんたのために家事を全部やってあげる。料理も、洗濯も、掃除も全部やってあげる！」
「いや、それはありがたいけどさ・・・」
「でしょ！新婚ホヤホヤの奥さんの手料理が食べられるなんて幸せ者よ～」
「それが実の姉じゃなければな」
「何よ～」
「その作り声もやめろ、うざい」

「ねぇ、主」
ふいにクレムちゃんが話しかけてきた。
「ん？何？」
「朝日はここに泊まるの？」
「あ、いや・・・」
「ちょっと正午！！」
「何だよ」
「あんた、こんな可愛い子に主なんて呼ばせてるの！？」
「お、俺が呼ばせてるんじゃねぇよ！この子が勝手に呼んでるんだよ」
「そ、そうなの？クレムちゃん」
「そうなの、主は私の主なの」
なんだかややこしいな。
「そ、そうだとしても主だなんてだめよ」
「そうなの？」
「そうよクレムちゃん。こいつのことは下僕なり犬なり好きに呼べばいいの」
「待てえええええええええええええええええい！！」
俺の扱いひどすぎんだろ！！下僕もそうだけどまず犬ってなんだよ！！
「何よーいいじゃない。こんな可愛い子に犬って呼ばれるなんて何だか興奮するでしょ？」
「俺は、そんな特殊な趣味をしていない！！」
俺のことなんだと思ってるんだよ！
「じゃあ、せめて正午って呼び捨てでいいじゃない。それくらいならいいでしょ？」
「ま、まぁそのくらいならいいけど・・・」
もうこれ以上つっかかると疲れそうなので俺が折れた。
「じゃあクレムちゃんこいつのことは今度から正午って呼んでね」
「わかったなの」

「はぁ～・・・」
何かもう色々とどうでもよくなってきた。
「正午」
いきなりクレムちゃんが俺のことを呼び捨てで呼んできた。
「な、何？」
う～んやっぱりあの呼び方で慣れていただけに違和感がすごいな。
「私ね、朝日にここに泊まっていってもらいたいの」
「へ？」
「クレムちゃん！？」
ギューーーーーーーーーー！！
「あ、朝日がいればある・・じゃなくて正午が仕事に行っている間も一人じゃないし・・」
そうなんだよな～。俺もそれは考えていた。姉ちゃんがこの家にいてくれればクレムちゃんが一人で留守番をしていることもなくなる。そうなればさっきまでの悩みも全て解決なのだが・・・
「クレムちゃんお菓子好きなんだ。あら、これ美味しいわねボリボリムシャムシャ・・」
「うん。このお菓子は私のおすすめなのボリボリムシャムシャ・・・」
・・・・・・・・大丈夫かなぁ～～～～（泣）
絶対になんかあるよ～。不安しかねぇよ～。
「で、正午クレムちゃんもこう言ってることだし私がここに泊まることに異論はないわよね？」
「いいよね正午？」
「う、う～～～ん」
クレムちゃんの目がキラキラしながら俺を見つめている。それに便乗するかのように姉ちゃんもキラキラした目で俺を見てきた。
キラキラキラキラキラキラキラキラキラ・・・・・
「だぁ～！もうわかったよ！！泊めればいいんだろ！泊めれば！」
もう、どうにでもなりやがれ！

「やった〜！クレムちゃんこれからよろしくね！ついでに正午も」
「ついでかよ！！」
「うん。よろしくなの」
クレムちゃんが嬉しそうに笑っていた。
まぁ、クレムちゃんもこれで一人で留守番することはなくなったわけだし
「まぁ、いっか」
こうして俺の家に新たな住人が増えました。まったくどうなることやら・・・

お出かけの時間（前書き）

新年明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします。

お出かけの時間

「そ、それじゃあ行ってくるぞ～」
現在時刻朝の7時。いつものように仕事にいくため家を出ようとする。
「は～い、行ってらっしゃーい」
「行ってらっしゃいなの」
後ろから少し間延びしたような声が聞こえてきた。
「二人ともまだ寝てればいいのに」
「いや～あんたの出勤姿なんて滅多に見れないからねー」
からかうように姉ちゃんが言ってきた。まったく何言ってんだか。
「クレムちゃんもわざわざ起きてこなくてよかったのに」
「だって、正午のことちゃんとお見送りしたかったんだもん」
「そ、そうなの？」
「よかったじゃない正午。こんな可愛い子に朝からお見送りされて」
まぁ確かに悪い気はしないが。
「あ、正午」
「ん？何？」
「帰りにお土産買ってきてなの」
「・・・・は？」
「何かチョコレート系のお菓子がいいの」
「やっぱそれ目当てか～～い！！」
何となくそんな気はしてたけどね・・・・はぁ～・・・
「わかったよ。じゃあ行ってきます」
「いってら～」
「待ってるからよろしくなの～」
あぁ・・・朝からいきなり憂鬱になりそうだ。
「さてと、あいつも仕事に行ったことだしもう一眠りしようかな」

「え、朝日寝ちゃうの？」
「あら、クレムちゃんは眠くないの？」
「うん・・・それになんだかお腹がすいたなの」
「うーん、じゃあ少し早いけど朝ごはんにしましょうか」
というわけで私は朝ごはんを何か作ることにした。
「え～と冷蔵庫の中身はっと・・・」
何かないかと冷蔵庫の中を漁ってみる。しかし
「何よこれ、何にも材料ないじゃない」
ほとんどすっからかんな状態であった。
「朝日、朝日」
「ん？なぁにクレムちゃん？」
「正午はいつもこれを食べてるの」
目の前にだされたのはカップラーメンだった。
「まさか、あいつ毎日これ食べてるの？」
「そうなの。ここ最近は私もこればかり食べてるなの」
「な、なんですって！！」
あの馬鹿はこんなに可愛い子にカップラーメンしかあたえていないというの！！
「許せない・・・許せないわ！！」
「ど、どうしたの朝日？」
「そんな栄養バランスの偏ったものばかり食べていたらいつか体を壊しちゃうわ」
「そ、そうなの？」
「ええ、だから今日からは私がおいしくて栄養バランスのとれた料理を食べさせてあげる！」
「な、なんだかすごいの・・・・」
「という訳で買い物に行くわよ！！」
「買い物？」
「確か近くのスーパーで朝市みたいなことをやってたはずだからそこに朝ごはんの材料を買いに行くわよ」

「わ、わかったなの」
「よし、それじゃあ行きますか！」
パジャマからさっと私服に着替えて家を出る。
「ところで、クレムちゃん。あなたずっとその服着てるわよね？」
「うん。私これしか服もってないの」
なんと！！またしても問題発言！
「それじゃあ、またお昼くらいになったら今度はクレムちゃんの服を買いに行きましょうか」
「え？私の服？」
「うん。大丈夫私が可愛い服を選んであげるから」
「あ、ありがとうなの・・・」
そんなこんなで今日の予定のことを話していたらスーパーについた。
「うわ～すごいの朝日！！たくさんお野菜とかが売ってるの！」
店先には新鮮で色とりどりの野菜がたくさん並べてありそれを見たクレムちゃんは嬉しそうにはしゃいでいた。
か、可愛い・・・・
「朝日？」
「はっ！？じ、じゃあ早速朝ごはんに使う材料を選びましょうか」
「わかったなの」
二人で一緒に朝市を見てまわる。クレムちゃんはつねに目をキラキラさせていてなんだかその光景を見ているだけでも楽しかった。
「ねぇ、朝日これ食べてみたいなの！」
「お、トマトかいいわねー」
材料はとりあえずクレムちゃんが食べたいというものを買っていくことにした。
「朝日！これもなの！！」
「はいはい、わかったから少し落ちついていてねクレムちゃん」
もしも自分に子供ができたらこんな感じになるのだろうかとふと思ってしまった。

しばらくして
「ふーたくさん買ったわね～」
両手に買い物袋をぶらさげながら家路につく。
「お買い物って楽しいの！！」
「そうでしょ～。お昼になったらまた出かけるからね」
「わ～いなの」
無邪気にはしゃぐ姿がなんとも可愛い。これは洋服選びのときが楽しみだわ。何着せて遊ぼうかしら・・・
そんなこと考えながらしばらく歩いていると信号につかまってしまった。
私の頭の中はお昼の買い物のことでいっぱいだったので信号待ちも全然嫌じゃなかった。
「あ、猫なの」
ふいにクレムちゃんがつぶやいた。
「ん？猫？」
言われて道路の真ん中を見ると一匹の猫がいた。普通の猫なら素早く道路を渡りきってしまうのだろうがその猫は足が悪いのかそれとも怪我をしているのか足を引きずっていてなかなか渡りきれないようだった。
その時前から一台のトラックが走ってきた。
しかし、減速する気配がまったくない。
このままいけば確実にあの猫は轢かれてしまう。
「ちょっと、あの運転手きずいてないの！？」
けれども猫はなかなか前に進めていない。
そしてトラックが猫の目の前にまで迫ってきた。もうだめだ。そう思い私はクレムちゃんの目を隠し私も思いっきり目をつむった。
そのときクレムちゃんが何かをつぶやいていた。

そしてその瞬間時間の流れが止まった。
「よし、これで大丈夫なの」

朝日の手をどけて猫のところまでかけよる。
「危なかったの。これからは気をつけなきゃ駄目なのよ」
猫を抱えて向こう側まで運んであげる。周りの安全を確認して朝日のところまで戻る。
「さてと、それじゃあ時間の流れを戻すの」
クレムはまたじゅもんを唱え時間の流れを戻した。

その時正午は
「何かあったな・・・つうか何かしたな」
一瞬頭痛が走り周りの動きが止まった。
クレムちゃんが力を使ったんだ。
「やべー嫌な予感しかしない・・・」
頼むから何事もおきていませんようにとひたすら願う正午であった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6421w/

この腕時計は時間を合わせてくれない

2012年1月4日08時48分発行